

シャンティ

shanti

2007
秋
10月号

特集

ミャンマー(ビルマ)難民の 昨日・今日・明日

第三国定住プログラム開始
そしていま、難民の思いは…

手を、とりあうこと。

私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。



社団法人 シャンティ国際ボランティア会

プロジェクトの風景

ラオス：移動図書館
Mobile Libraries in Laos



①子どもたちは待ちきれずに絵本を開く ②タートルアン広場での読み聞かせ。あたりはもう暗い ③視覚障がい者の施設で本を朗読する ④中学校での移動図書館の様子

SVAの移動図書館車が行くところ、そこはどこでも図書館になる。首都ヴィエンチャンの学校や広場、障がい者施設、大人を対象とした麻薬更正施設などを定期的に訪問している。ゴザを敷いただけの簡単な場所だか、車に積まれた本を自由に手にとって読むことができる。そこには新しい知識や物語がある。集まった子どもや大人たちは歌やゲーム、絵本の読み聞かせをSVAスタッフと一緒に楽しむ。やがて夜になると自家発電の蛍光灯がともされる。

ラオスでは書籍はあまり出版されていない。ましてや、子ども向けの本や絵本はとて少ないので、みんな図書館車が来る日を心待ちにしている。「ここに来れば、好きな本が読めるから」

移動図書館車は、新しい世界へと飛び立つ希望を運んでいる。

(ラオス事務所・高橋久夫)

表紙：ミャンマー難民キャンプ（バンドンヤン）の小学校



私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ（平和）な社会の実現をはかります。

道

巻頭言

みち

多様性が生み出すチカラ

事務局長 茅野俊幸

SVAのニューズレター「シャンティ」は、今号から誌面、内容ともにリニューアルいたしました。「シャンティ」を通してSVAの活動を伝え、協力者の皆さまとのつながりを大切にするニューズレターにしたいと考えています。

さてSVAの活動は、27年前「慈しみの心をもって社会を変えていく」という「志」をもった運動としてスタートしました。その後、NGOとしての歴史と実績を重ねるなかで、多くの方々から信頼と期待を寄せただけになりました。それは、日本全国に広がる幅広い世代の協力者の方々が、SVAの実践的な国際協力活動に共感され、会員、絵本を届ける運動やクラブ・エイド、チャイルド・ブック・サポーター、指定募金、災害ボランティアなどに多様なチカラを発揮して下さっているからだと思えます。しかし、その一方で組織を健全な状態に

維持していくための課題は増えています。社団法人としての説明責任、管理、運営の強化、海外事業の継続や評価、政策提言など、毎年いくつもの課題を解決していかなければなりません。

時々、協力者の方から「小さく、小回りの利く、ゆるやかな運動のほうが活動しやすい」という声をいただきます。確かに、やりたい活動を個人の思いで実践していけば、このような課題に悩まされることはないでしょう。しかし、それだけでは、社会のなかにうねりを生み出すような活動にはなりません。

組織とは、個人ではお互いにもちえない部分を補完しあい、試行錯誤をくり返しながらも、目的を達成する努力をしていくところにその意義があります。それぞれの個性や技術、志をつなぎあわせることで生まれる組織のチカラには無限の可能性があるので、それは「多様性が生み出すチカラ」と言ってもいいでしょう。

SVAは「すべての子どもが男女の区別なく初等教育の課程を修了する」ことをめざしています。活動の過程で、多くの人がかかわり「共に社会の課題を考え、共にチカラを出しあって進む」という特徴があります。それを積み重ねていくことで、SVAの活動は「アジアに生きる子どもたちの輝く笑顔」に結びついていくのだと信じています。新しい「シャンティ」も、このような思いで皆さまと共にありたいと願っています。

わたしが好きな絵本

my favorite book

わたしの名前は、タースター・チャルーンソックです。みんなからはフックと呼ばれています。小学5年生、11歳。クrontoi・スラム図書館のすぐ裏に家族6人で住んでいます。わたしは、毎日学校が終わると図書館に遊びに来ます。ここでは一人ぼっちでさびしい気持ちになることはありません。友だちやスタッフのお姉さんたちがいつも一緒にいてくれるから。

図書館にある絵本も大好きです。一番のお気に入りには『みんなを楽しくさせる鐘』。一度スタッフが読んでくれたのが面白くて、それから自分でもくり返し読むようになりました。小僧さんが毎朝叩く鐘の音でお日さまもニワトリも花も人間も、みんなが楽しくなるというおはなしです。この中で何度も鳴り響く「ペーン」という鐘の音が大好き。この音でみんながうれしそうにしている絵を見ていると、わたしまで楽しく幸せな気分になるんです。こんな鐘がほんとにあったらいいのになあ。

(インタビュー：SVAタイランド 松尾久美)



特集

ミャンマー(ビルマ)難民の 「昨日・今日・明日」

Myanmar Refugees

第三国定住プログラム開始
そしていま、難民の思いは…

「難民」になるまで

メラ難民キャンプでSVAの図書館員として働いていたチュー・ポー・クさん(31)の話。

「出身はカレン州の村です。1987年、11歳のとき、ミャンマー軍が弾薬などを運搬するポーターを探していました。ポーターは酷使され、使い物にならなくなると射殺されてしまうのです。いつ父親が連れて行かれるか不安で恐ろしく、家族4人でタイに逃げました」

チュー・ポー・クさんの義父であるクー・レーさん(58)も、当時の経験を話してくれました。

「ある晩、夕食を食べようとしていたら突然ミャンマー軍が入ってきて、そのままポーターに連れて行かれたのです。四六時中、ライフルを突きつけられ、使い放題に使われて、仕事をサボったり逃げたり、動けなくなれば、即処刑されます。一緒にいた人が処刑されるのを7回も見ました。幸運なことに村長が軍に口添えしてくれ、何とか釈放してもらいました」

クー・レーさんは1989年に妻と6人の子ども(上は15歳から下は2歳まで)を抱えて国境の山の中を歩き、タイに逃れました。

「ある日、村が突然砲撃され、多くの



ミャンマー

難民がタイ国境を越え、最初の難民キャンプができたのは1984年。現在では南北に広がる国境沿いの9つのキャンプに、カレン族を中心に15万人以上が居住し、その数は今も増え続けています。ミャンマー国内では、少数民族に対する人権弾圧や強制労働、自治権をもとめるカレン民族と政府軍の闘争が続き、本国帰還のめどは立っていません。

そうしたなかで、2005年から第三国定住プログラムが本格的に開始され、2007年7月末までに約1万人が定住受入国へと旅立ちました。現在、総人口5万人を擁するメラ難民キャンプでもアメリカへの定住審査が進んでいます。キャンプ内にあるSVAの図書館員の多くも海外への移住を希望しており、SVAの事業にも大きな影響がでています。

第三国定住は、難民にとってどのような意味をもつのでしょうか。祖国を離れた時の状況、限られた選択肢しかないキャンプでの暮らし、そして第三国定住に揺れる現在の思いを聞いてみました。



人が亡くなりました。私は、どちらの
方角に逃げたらいいかわからず、最
低限の米と衣類だけを持ってすぐさま
家族と出発しました。家には米、牛、
鶏などの財産も十分にありましたが、
すべて置いてきました。夜中に激しい
雨が降り、一家7人でバナナの葉にく
るまって寒さをこらえながら夜を明か
しました。2歳の息子はまだ満足に歩
けず、4歳の娘も激しい下痢をしてい
たので、ゆっくり移動するしかありま
せんでした。3日後ようやく難民キャ
ンプにたどり着いたのです」

もっと戦闘の激しかった地域では、
避難の途中でミャンマー軍の兵士に金
品や食料を奪われ、男性はポーターと
して連行され、女性は性的暴行を受け
たりしたそうです。どこのキャンプで
も、地雷にあたって手脚を失ったり、
目が見えなくなったりした人たちも多
く、想像を絶する苦難の果てに難民キャ
ンプにたどり着いたことを物語ってい
ます。また、タイ側に逃れても必ずし
も安全とはいえず、ミャンマー軍が国
境を越えて難民キャンプを攻撃したこ
ともありました。

難民キャンプで暮らす

やっとの思いで到着した難民キャン

いことがストレスです。いままでキャ
ンプの外に出たのは、メラ地域でやっ
ているタイ王室の農業事業に駆り出さ
れた時と、子どもが病気で町の病院ま
で付き添った時だけ」と言います。
アメリカ定住が決まっているチュー・
ポー・クさんとチュー・ク・ムイさん
(25)は、図書館員として勤めていた時
の一番の思い出を、年に一度開催され
る「図書館員合同研修会」と口をそろ
えて語っていました。

これは7つのキャンプ、25の図書館
で働いている全図書館員50名の難民が
一堂に会し、3日間図書館員としての
能力アップを図る研修で、毎年タイ北
部のメーソットで実施されています。
研修内容や仲間に出会える楽しさもある
ことながら、キャンプから離れて外の
空気に触れること自体が彼らにとって
大きな喜びになっているようです。

第三国定住を希望して

難民問題の解決には、本国への帰還、
一時庇護国(難民を一時的に受け入れてる国)
への定住、第三国定住がありますが、
ミャンマー難民の場合、2005年に
開始された第三国定住プログラムに関
心が集まっています。

クー・レーさんは、「私も子どもた



図書館で仕事をする
チュー・ポー・クさん



キャンプ内の様子を話してくれた
ジョー・メーさん



「妻と6人の子どもと
山中を3日間歩きました」
クー・レーさん



「子どもが自立したら
カレン州に戻りたい」
チュー・ク・ムイさん



メラ難民キャンプに新しく到着した家族

ち家族も、アメリカへの定住を申請し
ています。カレン州への未練はありま
せん。むしろ忘れてしまいたい。私は
家族と一緒にあればどこでも幸せ。も
し、平和になってもミャンマーには帰
らないでしょう」と話していました。
家族との絆を大切にしている選択。同
時に、忌まわしい過去の記憶を消して
しまいたいと思っているのかもしれない
せん。

定住が決まっているチュー・ポー・
クさんの心境も晴れやかです。「8月
16日に夫と2人の子ども(6歳と1歳)
と一緒にキャンプを出ます。定住先の
テキサスのことも、どんな生活が待っ
ているのかもわかりませんが、とにかく
うれしい。子どももキャンプにいる
よりちゃんとした学校に行けるでしょ

う。将来はわかりませんが、もしカレ
ン州のカレン人による統治が認められ
れば、帰ってみたいと思います。でも、
その時子どもが行かないと言えば、戻
ることはないでしょう」

チュー・ク・ムイさんも、出発前の
心境をこんな風に答えてくれました。
「アメリカには、夫と6歳、3歳、6カ
月の子どもたちと出発します。言葉や
習慣が違うので不安はありますが、で
きる仕事があれば何でもします。すで
に私の両親はワシントンDCに、夫の
両親はオクラホマに定住しました。面
接の時「アメリカに親戚はいますか」
と聞かれたのですが、その時は両親た
ちも定住が決まっていなかったため「い
ません」と答えるしかありませんでした。
でもいつか一緒に暮らしたいと願っ

プ。そこはタイの山奥のわずかな土地
に、竹と木の葉を使って建てられた家
が密集しています。敷地全体にフェン
スが張りめぐらされ、国連機関が難民
を保護し、食料、医療、教育などはN
GOが支援、タイ内務省と陸軍がキャ
ンプ内外の治安を管理しています。カ
レン族のキャンプでは、カレン民族の
自治組織が作られ、国連機関、内務省、
NGOと連携しながらキャンプを運営
しています。

ジョー・メーさん(56)も、1980
年代半ばに難民キャンプに来ました。
キャンプでの食糧事情について聞いて
みると、「キャンプに到着した当時は、
ねばねばした古米と、にがい魚漬けの
配給しかなく口に合いませんでした
が、そのうち慣れました。いまは配給
の質もよくなり、米、魚漬け、豆、砂
糖、油などが家族の人数に合わせても
らえます。しかし、肉、野菜、果物は
配給されないの、自分で買わなけれ
ばなりません」

カレン州で農業をしていたクー・レー
さん。「ここでは米どころか家庭菜園
すら作れません。故郷で米作りがで
きた時がとても懐かしい。外に出る自由
がないのも辛いです」
最低限の食糧のこと、住むことはで
きて、自由な外出、キャンプ外での
就労は許されていません。ジョー・メー
さんも、「許可がなければ外出できな

ています。私の夢は子どもがきちんと
した教育を受けて育つこと。子どもが
成長して自立したら、カレン州に戻り
たいと思います」

2人の図書館員が定住を選んだの
は、子どもたちの将来が開けることが
大きな理由のようです。キャンプに暮
らす難民のうち、半数は12歳以下の子
どもたち。その多くがキャンプの外の
世界を知らずに育っています。努力し
て勉強しても、好きな職業に就くこと
やキャンプの外に出る自由はありません。
難民問題が長期化する一方で、祖
国への帰還の見通しが立たず、子ども
の将来を考えて第三国定住を選択する
若い世代が多くみられます。

コラム
KEYWORD

第三国定住 プログラムとは?



難民問題の解決策として、本国への帰還、一次庇
護国への定住、第三国への定住がある。ミャンマー
本国への帰還のめどがまったく立たず、タイ政府から
キャンプ以外の滞在許可も下りないため、2005年
1月 UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)によってキャ
ンプに住むミャンマー難民の第三国定住プログラムが
開始された。

現在、アメリカ、カナダ、オーストラリア、北欧
などの10カ国が定住を受け入れている。UNHCRの
発表によると、2007年7月末までに1万78人がタイ
を出国し、主な定住先はアメリカ4876人、オースト
ラリア1774人、カナダ1269人である。

定住までの手順としては、UNHCRに申請、各国政
府による面接、健康診断、定住国の文化や生活事情・
渡航の仕方などの説明、そして出発となる。基本的に
難民は受け入れ国を選ぶことはできないが、希望国に
親戚がいる場合は配慮される。アメリカはすべての人
を対象にするが、オーストラリア、カナダなどは教育
や技能の高い人を選ぶ傾向にある。

定住先では、住居や生活費、子どもの養育費、医療、
言語や職業トレーニングなどが保障され、就職のあっ
せんなどのサービスも提供される。今後の問題として
は、言語や生活習慣の違いによるストレスや主流社会
からの差別、また母語や文化の喪失などが懸念される。

見えない祖国への帰還

一方、前出のジョー・メーさんは祖国への帰還を願っています。

「私はこのキャンプに留まって、故郷に帰れる日を待ちます。私たちはすでに祖国を離れ、いろいろな肩身の狭い思いをしています。この上さらに外国へ渡って、カレンの仲間からも引き離されてしまうのはとても辛い。先日、アメリカに定住した人が、カレン人が一人もない土地に定住させられ、ホームシックにかかって電話口で泣いていました。幸い子どもたちも外国に興味はないと言われ、私も新しく言葉を勉強できるほど若くはないのです」

ペー・テーさん(61)は自治組織のひとつである図書館委員会のメンバーです。やはり祖国へ戻ることを望んでいます。

「メラキャンプのゾーンB1に住む300世帯のうち、第三国定住を希望しているのは100世帯のみです。第三国定住は、カレン民族をバラバラにし、団結を弱めるものです。カレンの言い伝えにこんな言葉があります。「孫たちよ、他者の国に行く時は気をつけなさい。いつか彼らは翻って本性をあらわす。自分の国にいるのが一番安心なのだ」。タイ社会においてもカレン民族は困難な状況に置かれていま

SV Aは何ができる？

SV Aは2000年から、国連機関(UNHCR)などの資金援助をうけ、ミャンマー難民キャンプでの図書館活動を続けてきました。ほとんど英語の書籍しかなかったキャンプの中で、カレン族の図書館員がカレン語で子どもたちに絵本や紙芝居を読み聞かせるといふ、地域に根づいた図書館を作り出した。民族の伝統文化と価値観を尊重し、考える力や創造力が様々な問題を解決するという立場から、知識の伝達や文化の継承がいかに大事かということとを伝えたかったのです。

ある難民キャンプの図書館委員会の代表がこんな話をしてくれました。

「祖国を逃れ難民となった私たちが、自分たちの民族に誇りをもっている。だが、難民キャンプで生まれ育った子どもたちは祖国を知らず、自分たちの民族や文化も知らずに成長してきている。私たち大人がきちんと伝えなければならぬのに、長い難民生活のなかでそうしたものは徐々に失われ、どうすればいいか悩んでいた。そんな時、SV Aは私たちの文化を守ろうと、いや、守るべきだと、図書館活動を通して伝統文化活動を支援してくれた。忘れかけていた文化の大切さをSV Aが



「第三国定住はカレン族の団結を弱めます」
ペー・テーさん



「国内避難民の支援をしたい」
ダー・ムさん



配給を待つひと

家のなかの様子



難民キャンプでの人形劇公演

す。それは第三国に行っても変わらないでしょう。私たちは帰還が可能になるその日まで、この難民キャンプに団結して留まっている必要があるのです」

個人の利益を優先するか、カレン民族としての結束を優先するか。「明日」の選択に絶対的な答えはありません。ただ、第三国定住を希望する人のなかには、キャンプの自治にかかわってきた人や教員、医師、NGOのスタッフとして活躍してきた人が多く、今後のキャンプ運営に大きな影響を及ぼすことは避けられません。

第三国定住は、定住する者にも、キャンプに残る者にも、さまざまな問題をつきつけています。どちらにしても自らの力で運命を乗り越えていくしか、難民に与えられた道はないのです。

新しい世代の考え方を紹介します。前出のクー・レーさんの娘、ダー・ム(22)さんは、「国境を越えて難民キャンプにも入って来られず、故郷にも戻れない国内避難民が、ミャンマー側で食うや食わずの生活をしています。私はアメリカに行って市民権を得て、国内避難民を支援する仕事をしに戻って来たいのです」と話してくれました。

国際社会からの支援もなく「忘れられた難民」と言われるミャンマー難民。自らの民族の問題にかかわろうとする若い世代の存在は、カレン族にとっての「希望」と言えます。

教えてくれた。本当に感謝している」

この感謝に応えるためにも、SV Aはミャンマー難民への支援活動を継続します。SV Aの基本的立場は、それぞれの選択とその行く末を見守っていくことです。第三国定住でキャンプを離れる図書館員の後任育成や、国連機関からの予算の削減など大きな課題がありますが、図書館活動がもたらす喜びを伝えることが、いま必要なことだと思います。

執筆者

【本文】 小野豪大 (おの・たけひろ)

1993年SV Aに入職。ラオス事務所、東京事務所を経て、2007年5月からミャンマー難民事業事務所へ。現在、所長を務める。

【コラム】 加藤美生 (かとう・みお)

2007年5月SV Aに入職。ミャンマー難民事業事務所図書館活動コーディネーター。

写真 瀬戸正夫 (4p/6p左/8p中央・左/9p)



第2回コンサートに出演したぶらじの商会

アジアに絵本を届ける コンサートを開催しています

アジアの子どもと出会う旅



右：村人に見送られる参加者
中：朝の托鉢
左：子どもの家での交流会

ホームステイをしたナローン村は、外国人が滞在するのは初めて。歓迎会では村を挙げてのもてなしを受け、ツアー参加者も歌ったり、踊ったり、楽しい時を過ごしました。その後参加者は2人ずつ、各家庭にわかれしました。夕方、激しい雷雨で村全体が停電。ロウソクの灯りの下で家族と一緒に食事をいただき、言葉はわからなくても、心を通じ合わせた忘れられない一夜となりました。

ラオスの図書館活動を 見に行きました

8月20～26日、協力者の皆様にSVAが行っている図書館活動を実際に見ていただくスタディツアーを実施しました。今年訪問したのはラオス。参加者は15歳から71歳までの26人。ヴィエンチャン市立図書館の見学や学校訪問、村でのホームステイなどを体験し、子どもたちと交流しました。

訪れた小学校では、昨年SVAの図書館員研修を受けた校長先生が絵本の読み聞かせを行い、子どもたちが絵本を楽しんでいる様子を見ていただきました。

(佐藤真子)

参加者に感想をうかがうと、「読み聞かせの様子に感激しました」「ホームステイが一番の思い出。ほかではできない体験です」「ラオスの風景は、昔の日本を思い出します。子どもたちがいきいきとして楽しそう」「まわりの人に本の大切さを伝えていきたい」などの声がかれました。また課題としては「子どもたちともっと交流したかった」「もっといろんな本を読ませてあげたい」「参加者同士ももっと話し合う時間がほしかった」などがありました。

ラオスでも図書館活動は少しずつひろまっていますが、まだまだ行き届いていない部分がたくさんあります。絵本を届ける運動やチャイルドブック・サポーターを通して、協力者の皆様と取り組んでいきたいと思っています。



瓜の煮込み、肉の煮込みで、1週間。最近では曜日での煮込みかわかるようになってきました。仕事での渴きを癒すのも湯気のたつ「シンチャイ」と呼ばれる緑茶。砂糖を入れて飲みます。

のスタッフに背中を押され、励まされています。彼らのために、彼らの祖国のために、そして、彼らの祖国に生きる子どもたちのために、日本を出発する時に手渡された饒の言葉通り、アフガンのスタッフと共に活動に取り組んでいます。

2カ月経ってこちらの生活に慣れてきた頃、外務省の退避勧告を機に一時帰国となりました。しばらくは、東京事務所のサポートを行う予定です。

Event

第3回アジアに絵本を届けるコンサート 「癒しの音楽&フェアトレード」

今回はタイ伝統楽器による弾き語りや、スタジオジブリ作品「海かきこえる」の音楽を担当した永田茂さんの演奏。また「フェア・トレード」をテーマに、三遊亭遊之介さんとSVAスタッフが話します。

日時 10月12日(金)
午後の部15時、夜の部19時

会場 クラシック・ライブ・カフェ
「カーサ・クラシカ」
東京都港区赤坂3-19-9
オレンジボックスビルB1
(地下鉄「赤坂見附駅」徒歩2分)

出演 アドゥン、永田茂

会費 2100円

※お申し込みはSVAまでご連絡ください。次回は12月7日(金)にコンサートを予定しています。
(担当 国内事業課)

Staff Diary

アフガニスタン ● 鈴木淳子の1日

ア フガニスタンに来て2カ月が経ちました。私の1日の流れと最近思うことを書かせていただきます。

朝6時 暑さと、近所のヤギの鳴き声で目を覚まします。部屋の温度計はすでに体温と同じかそれ以上を指しています。
イスラム教圏であるアフガンでの女性の服装は体の線を見せないことが基本。暑くても長袖長ズボンの

「シャルワカミーズ」を着て、女性はさらに「チャダ」と呼ばれる大きな布で神聖なものとされる髪の毛を覆うのがアフガン流です。強い日差しから肌を守ることはできませんが、暑さは倍増します。

朝8時 ミーティングからアフガン事務所の1日が始まります。スタッフは23人(このうち女性は2人)。「サラムレコム(こんにちは)」「オー、オー(はい)」「サイシュ、サイシュ(OK)」と賑やかなパシトゥン語を聞きながら、アラビア文字が映し出されるパソコンの画面を横目に見つつ、私は静かに総務経理の仕事が続けます。

昼12時 暑くても、熱い煮込み料理をいただくのがアフガン・スタイル。調理スタッフのクラガとタリックが作った料理を、事務所のスタッフ全員が集まって食べます。生きるために黙々とさじを動かします。
金時豆のような大きな豆の煮込み、オクラの煮込み、茄子の煮込み、南

夕16時 終業時間。日が落ちると治安が悪くなるので、16時以降は「早く帰らなければ」と「あー、仕事が終わらない」の狭間で、時計と夕暮れの空を気にしながら1日の仕事の片付けを急ぎます。

夜19時 夕飯はオーストラリア米を炊いたり、日本から持って来たそうめん、うどん、そばなどの麺を茹でたりしています。最近「頑張った日は缶詰の日」と決めて、鮭の水煮、鯛の煮付け、焼き鳥、メンマ、「こはんですすよ」など、どの缶詰にしようか選ぶのが楽しみになってきました(これらはまれにカプフルで買うことができます)。

ア フガンに来て貴重さを実感したのは「電気」です。ここでは「シテイパワー」と呼ぶ電線を伝わってくる電気の供給が不安定です。夜、シャワーを浴びている時に電気が切れ、暗闇で生まれたままの姿になる時は多少あせりますが、今ではもう慣れました。しかし、電気がないと冷蔵庫もエアコンも扇風機も動きません。アフガンに来て電気のありがたさを実感しました。

宿舎から事務所までのわずか10分弱の距離を、現地スタッフが毎日車種を変え、通る道を変え、道によっては車内が見えないように窓ガラスに目隠しを張るなど細かな心遣いをしてくれます。アフガンでは外国人が外を歩くのは危険なので、車から降りて夕飯の買い物ができない私の代わりに、山積みされた中から美味しそうなカチャル(ジャガイモやボンジャイ(芋)を選んで買ってくれます。少しでも不自由のないように、危険な目にあわないようにと、いつもそばにいて守ってくれる現地

文・イラスト：
鈴木淳子(すずき・あつこ)
静岡出身。商社で10年営業を経験し、2003年からSVAスタッフ。クラフト担当を経て2007年5月にアフガニスタン事務所へ。趣味はラジオを聞くこと(特にAM)。座右の銘は「Now is the time」。ニックネームは「スー」。

写真協力：原道雄

06:00



08:00



12:00



16:00



19:00





音楽を通じてボランティア活動を続ける

多彩な方です。ソプラノ歌手・ピアノの教師・SVA会員・5児の母、そして「音夢の会」代表として数多くのチャリティコンサートを開催。保育園やホスピス、老人ホームでも歌うボランティアを続けています。今年6月の「SVAアジアに絵本を届けるコンサート」すべての人に歌の心を届けた「でも素敵なソプラノの歌声で満員の観客を魅了しました。」

岡野さんがSVAに出会ったきっかけは、バンコク在住の9年前、家族旅行で訪ねたカンボジアのアン

コールワット。内戦の爪あとが生々しく残っていた当時、物乞いをするたくさんの子どもたちに囲まれ大きなショックを受けます。

そして新聞で神津佳子SVA理事(現SVA副会長)が主催していたボランティアグループ「マイトリリー」の「カンボジア語絵本出版の記事を目にし、日本に帰国した折、さっそく連絡をとります。「絵本支援の活動はあのカンボジアの子どもたちに大きな希望となる」と思ったから。その後は「マイトリリー」の一員としてSVAと協力し、カン

ボジアやラオスでの絵本出版や図書館建設などの活動に参加してきました。

その一方で、子どもの頃から音楽が大好きで本格的に音楽を学んだ岡野さんは、92年から「音夢の会」を友人と結成し、茨城を中心に「心に残る温かいコンサート」の企画と運営を続けています。スマトラ島沖大地震が起

こつた時にもすぐに緊急救援チャリティコンサートを主催し、20万円の募金をSVAに寄付してくださいました。

「これからはSVAに頑張っているってほしい」と岡野さん。「絵本や教育は、子どもの根っこ部分を育ててくれる。将来はその子たちが国を支えていきます。教育支援は時間がかかりますが、大事なことだと思います。日本の若い人たちもアジアに目を向け、SVAの活動のことをもっと知ってほしいですね。」

(国内事業課 岩船雅美)

東京事務所のうぶき



6月〜8月の活動の一部をご紹介します。

- 6月**
- 1〜8日 ドイツ・G8サミット関連イベントに出席(案) 1〜15日 タイ・カンボジア・ラオスのクラフト生産者訪問
 - 2日 長野・大輪寺と向陽院で報告 4日 長野・瑞松寺婦人会で報告 8日 チャリティコンサート「すべての人に歌の心を届けた」/仏教NGOネットワーク総会でジャワ島地震救援報告 9日 東京・天台宗一隅を照らす運動でクラフト販売
 - 絵本の土曜ボランティア日 11日 ティンバーランドで絵本ワークショップ 14日 東京入管で難民審査(案) /曹洞宗山口県宗務所の現職研修会で講義(大意) /伊藤忠商事で絵本ワークショップ 18日 姫路東ロータリークラブで報告 20日 「世界難民の日」イベントでパネリスト(市川)
 - 21日 東京・国際子ども図書館にカンボジア民話絵本を寄贈 23日 東京・調布市立若葉小学校で絵本ワークショップ 22〜24日 島根・アワガン寺子屋プロジェクトで報告 25日 事務局会議 28日 2008年G8NGOフォーラム発足/埼玉・能仁寺で講演(大意) /豊田通商で絵本ワークショップ 30日 宮城・徳本寺で報告

7月

- 1日 曹洞宗広島県梅花大会でクラフト販売 2日 SVA新田会長を囲む会開催/東芝ボランティアフェアで絵本ワークショップ 3日 理事会へ海外事業部会、新規事業、資金調達、G8のとりくみ 5日 東京・アフガニスタン報告会/曹洞宗近畿管区青少年教化研修会で講演(大意) /青森・曹洞宗婦人会研修会で講演(兼意) 5〜8日 東京災害ボランティアネットワーク主催三宅島研修に参加 6〜13日 スタッフ面談 10日 東京・泰宗寺でチャリティ寄席、報告 11日 日産NPOラーニング奨学金制度で2名が研修開始 14日 長野・沙羅の会で報告 15日 奈良・辯天寺で講義(案) 18日 新潟県柏崎市にスタッフを派遣し、中越沖地震救援活動開始/広島・法蓮寺で報告 19日〜8月31日 夏募金キャンペーン 21日 絵本の土曜ボランティア 21〜8月5日 JICA委託ナパール事業事前調査(伊藤) 24日 事務局会議 24〜28日 フィリピン・アジア地域ODAフォーラムに参加(三宅) 25日 東京・仙翁寺で絵本ワークショップ/神奈川・西福寺で報告 27日 東京・武蔵野市国際交流協会で教材ワークショップ 28日 広島・神応院で講演(大意) 31日 東京・ラオス人形劇公演でクラフト販売

8月

- 1日 SVAホームページをリニューアル/長野・常徳寺で講演(茅野) 2日 連合長野の平和集会で報告 3日 チャリティコンサート「納涼・赤坂怪談」サンパと落語の真夏の出逢い」 3・4日 滋賀・比叡山サミットで特別フォーラムパネリスト(案) 5日 静岡県ボランティア協会報告 7日 川崎市の美容師有志によるチャリティ・カット 10日 渋谷区職員労働組合女性部でクラフト販売 13日 栃木・西方寺で報告 13〜16日 事務所夏休み 20〜26日 ラオスで「アジアの子どもと出会う旅」 22・23日 タイで経理スタッフ合同研修会 24〜31日 各国海外事務所予算会議 22日 静岡・興誠中学で絵本ワークショップ 25日 愛知・たはら国際交流協会で国際理解講座(佐藤麻) 26日 曹洞宗秋田県梅花大会でクラフト販売 28日 セールスフォース・ドットコムで絵本ワークショップ 30日 外務省主催「アジア市民社会の連携を考える」パネリスト(案)



宮城県の徳本寺で、『おおきなかぶ』(福音館書店)の読み聞かせを実演する鎌倉

新しくなりました!

4月から準備をすすめてきた「シヤンティ」のリニューアル号をお届けします。「会員の方にとって読みやすく、親しみをもっていたらけるように」とデザインや構成を考えました。SVAの活動がわかりやすく伝わるよう、そして現地の子どもや人々の声、スタッフの紹介、会員の皆さまのお便りなどを掲載していきます。

デザインを担当する矢萩多聞さんは、これまで数々の本のデザインをてがけてこられた装丁家です。SVAと同じ年の27歳。インドと日本を行き来し、仕事をされています。すっきりとしたレイアウトとアジアらしさを感じるデザインが魅力です。

明治14年創業の株式会社大川印刷は、環境に配慮した印刷に取り組んでいます。「シヤンティ」の紙には、適切に管理された森林から伐り出された木材を使用したFSC森林認証紙を採用。WWF(世界自然保護基金)も持続可能な森林保全制度として推奨している紙です。また大豆インキよりも環境にやさしい石油系溶剤0%のノンVOCインキを使用し、製本は金具を使わないのり綴じにしています。SVAは子どもたちの内面だけでなく、外部環境も豊かなものであってほしいと考えます。

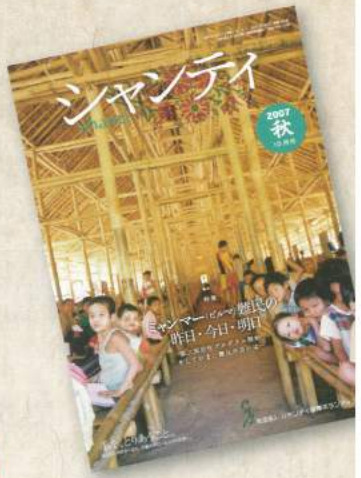
新しい出逢いを通じて生まれた、新しい「シヤンティ」。会員の皆さまとのコミュニケーションの場として役割を果たしていきたいと思ひます。

読者の声

6月号でニューズレターのアンケートをお願いしました。その回答をご紹介します。

- ▼字が小さく、量が多いので、読むのが面倒な時がある。(複数の方から) / 発行回数が年4回になる理由がわかりません。なるべく減らさなさい。(小杉太一さん)
- ▼発行回数と内容については今後も適正な方法を検討していきます。
- ▼できるだけ現地の人の生の声を知りたいと思ひます。(千葉・丸岡島さん) / 現地にどういったスタッフがいるのか知りたい。(岐阜・今村弥生さん)
- ▼活動にかかわる人々の声、スタッフの紹介なども掲載します。
- ▼新聞ではとりあげられないアジアの実情なども知りたい。(千葉・佐藤徳子さん) / 現地で生活している人がなぜその道を選んだのか、またその体験を通して生死をどう感じたのか。(島根・永見宏樹さん) / 「知る」こともボランティアの一環だと思います。多くの有益な情報を発信してほしい。(宮城・寺嶋良淳さん)
- ▼海外に現場をもつNGOとして、独自の情報を発信したいと思ひます。
- ▼パソコも持っている会員はホームページなどで「シヤンティ」が見られるようにすれば、経費が節約できると思う。(茨城・湯浅千代子さん、ほか)
- ▼技術的には可能です。今後同様の意見が多ければ経費も含めて検討します。
- ▼7月で80歳になりました。ひどい病気もなく年金で平穏な日々を有難く思っています。みんな幸せになりたくて少しでもお役にたたくために会員にしたいです。(滋賀・小野雅子さん)
- ▼ありがとうございます。どうぞお体を大切にしてください。

ご協力ありがとうございました。会員の皆さまの声をSVAの活動や誌面づくりに生かしていきたいと思ひます。ぜひご意見をお寄せください。(広報担当 村田泉)



① 中越沖地震の対応について

7月16日に発生した新潟県中越沖地震に際して、SVAは7月18日柏崎市にスタッフ2名を派遣し救援活動を開始しました。主な活動は、避難所での行茶と柏崎市災害ボランティアセンターの運営支援です。行茶は、被災された方に寄り添うことを目指すと同時に、要望を聞きとりボランティアセンターに報告し、今後の被災者支援につなげることを目的にしています。この活動は曹洞宗、東北福祉大学などと連携して行いました。詳細は同封のチラシ、またはホームページをご覧ください。

① ボランティア募集

SVA事務所で、平日、絵本とクラフト活動をお手伝いくださるボランティアを募集しています。絵本・クラフトが好きな方、子どもの支援に興味がある方、細かい作業やイラストが得意な方、力仕事ができる方。ご連絡ください。

担当◎国内事業課

① 2007年度「絵本を届ける運動」経過報告

今年から、アフガニスタンとミャンマー（ビルマ）難民キャンプにも絵本を届けることになりました。今年目標は、18,000冊です。

8月末現在の絵本の申し込み冊数 10,331冊

12月末まであと7,669冊の絵本が必要です。

皆さまのご協力をお待ちしています。

担当◎国内事業課 佐藤麻弥、林飛鳥

① 夏募金のご協力ありがとうございました

7月19日～8月31日に実施した「夏募金キャンペーン」にたくさんのご支援とあたたかいメッセージをありがとうございました。お寄せいただいた募金はSVAの活動に有効に使わせていただきます。皆さまからのメッセージは、ホームページのブログ「ほっとシャンティ」でご覧いただくことができます。

① SVA会費のお知らせ

SVAが行う活動は皆様からの会費と寄付によって支えられています。会費の期限は同封の振込み用紙に記載しています。期限の過ぎている方、もうすぐ過ぎる方は、会費のご送金をお願いいたします。個人会費は年間12,000円、団体会費は30,000円です。なお便利な口座振替もご利用いただけます。詳細はお問い合わせください。

担当◎澤田隆史

① 代議員会、「SVAの日」の集い

2007年度通常代議員会を下記の日程で開催します。おもな議題は2008年度事業計画案と予算案についてです。審議いただく代議員の方々には後日ご案内と資料をお送りします。代議員会終了後、「SVAの日」の集いを予定しています。「SVAの日」は1981年12月10日にSVAが設立したことにちなんで、先達を偲び、永年会員の顕彰、講演会などを行います。会員の交流の機会ですので、どうぞご参加ください。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

日時：12月15日（土）

代議員会 13:30～16:30

SVAの日 17:00～18:30

場所：U-Iゼンセン同盟本部
千代田区九段南4-8-16

※終了後、懇親会を予定しています。

担当◎経理・総務課 磯部正広、河口尚子

① CBSイベント「小さな絵本の大きなチカラ」

図書館や絵本のもつ魅力や可能性について一緒に考えてみませんか。SVAのスタッフの報告と皆さまの意見交換の場です。定員は各20名、参加費はお茶代込みで500円です。チャイルド・ブック・サポーター、会員の参加をお待ちしています。

日時：10月27日（土）15:00～

場所：ライブラリー・カフェ「ヴィッセン」

多摩市豊ヶ丘1-35-3 TEL 042-401-1751

日時：11月17日（土）15:00～

場所：レストラン「ジャイネパール」

千葉市美浜区打瀬2-12 TEL 043-213-1192

担当◎国内事業課 服部貴子、佐藤宣子

① 人事

- 異動 市川 海外事業課長から海外事業課長兼アフガニスタン事務所長へ（7月1日付）
小野 豪大 ミャンマー難民事業事務所長代行からミャンマー難民事業事務所長へ（8月1日付）
- 退職 アフガニスタン事務所長 伊藤 文二（6月30日付）
ラオス事務所スタッフ 米岡 雅子（6月30日付）
東京事務所スタッフ 岩船 雅美（9月30日付）
- 休職 中原 亜紀（2007年8月1日～2008年12月31日長期研修）

スタッフのふんふん 「この夏あったこと」

■今年のお盆は休暇をいただき、日本より涼しかったバンコクで過ごした。スアンブルーの火災から3年半。ようやく住居やコミュニティセンターの完成に近づき、住民や子どもたちに笑顔が戻っている。ちよつとうれしい夏だった。（桑辰也）

■1月からSVAのスタッフとなり、少しは勝手がわかってきた今日この頃。この夏は中越沖地震のため柏崎市に10日間ほど赴いたり、チャリティ寄席の手配など新しい経験をさせてもらいました。（百貫大道）

■8年間カンボジアにいたので、「日本の夏なんて怖くない」と思っていました。猛暑にヘトヘト。東京のコンクリートの地面の照り返しは辛い。カンボジアの赤土が恋しい？（鎌倉幸子）

編集後記 10年前私がSVAに入った時からボランティアをしてきたという汐見さんと加藤さん。加藤さんは体調がよくないのではありません。加藤さんは2人とも会員としてもSVAの活動を支えてくださっています。そんな加藤さんと加藤さん。加藤さんのおかけでこんな活動ができました。と伝えたいと思っています。感想をお寄せいただけるとうれしいです。（村田泉）



「シャンティ」は、FSC 森林認証紙にノン VOC インキ（石油系溶剤 0%）で印刷しています。

ご意見・お問合せ・入会の申し込みは

〒160-0015

東京都新宿区大塚31 慈母会館2・3階
社団法人シャンティ国際ボランティア会

TEL 03-5360-1233

FAX 03-5360-1220

WEB <http://www.sva.or.jp>

E-Mail info@sva.or.jp